

日本橋と村野藤吾を語る

藤森照信 (建築家・建築史家・東京大学名誉教授)

陣内秀信 (建築史家・法政大学特任教授)

対談＝藤森照信×陣内秀信×松隈洋(建築史家・京都工芸繊維大学美術工芸資料館教授)

[日時] 2019年3月31日(日) 14:00～16:30

[会場] 高島屋グループ本社ビル8階ホール

人気の建築史家二人が語る、日本橋と高島屋の建築。江戸・東京のリサーチを重ね、その成り立ちをいつも興味深いストーリーで伝えている陣内秀信氏が、まずは日本橋に焦点を当てて秘められた構造を見せてくれます。つづけて、建築文化への広い視野をもちながら、工法、様式、建築家にいたるまで深掘りしてゆく姿勢に誰もが引き込まれる藤森照信氏が、日本橋高島屋で気づいた新発見を語ります。



藤森照信 (ふじもり てるのぶ) / 建築史家・東京大学名誉教授・東京都江戸東京博物館館長

1946年長野県生まれ。1971年東北大学工学部建築学科卒業。その後東京大学大学院へ進学、村松貞次郎に師事し近代日本建築史を研究した。1991年には神長官守矢史料館で建築家としてデビュー。1998-2010年には東京大学生産技術研究所教授、2010-2014年には工学院大学教授を務め、2016年に東京都江戸東京博物館館長へ就任し現在に至る。主な著書に『日本の近代建築(上下)』(岩波書店、1993年)、『フジモリ式建築入門』(筑摩書房、2011年)など、また主な作品に「タンポポ・ハウス」(1995年)、「高過庵」(2004年)、「ねむの木こども美術館 どんぐり」(2006年)など多数。



陣内秀信 (じんない ひでのぶ) / 建築史家・法政大学特任教授

1947年福岡県生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了。法政大学工学部建築学科専任講師就任後、助教授、教授を経て、デザイン工学部教授に就任。2018年に退任、現在に至る。主な著書に『東京の空間人類学』(筑摩書房、1985年)、『南イタリアへ! ——地中海都市と文化の旅』(講談社、1999年)、『迷宮都市ヴェネツィアを歩く』(角川書店、2004年)、『イタリア海洋都市の精神 ——興亡の世界史』(講談社、2008年)、『イタリア——小さなまちの底力』(講談社、2004年)など多数。1985年に『東京の空間人類学』でサントリー学芸賞(社会・風俗部門)を受賞。

都市空間としての日本橋の歴史

陣内秀信

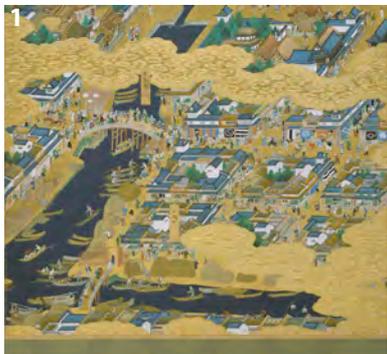


江戸の中心・日本橋の地理構造

私と藤森さんは同期で、立場は違えどいろいろなことに共感しながら一緒にやってきた仲間ですから、今日は一緒にレクチャーをやらせてもらえてうれしく思います。考えてみると日本橋はモノグラフがあまりないですね。銀座は僕の教え子の岡本哲志君が三冊くらい書いていますし、丸の内は藤森さんが『明治の東京計画』（藤森照信著、岩波書店、1990年）で取り上げていますが、日本橋について書く人って結構少ないんです。テーマになりにくいというのもあるかもしれません。しかしエポックを築いた出来事がたくさんあります。江戸時代にはまさに江戸の中心、日本の中心です。この機会に振り返ると、私の同期の玉井哲雄さんという日本都市史のパイオニアが、江戸の成立の話を1970年代の初めにもう研究していて、そこで町割りや町家が並んだ江戸中心部の空間構造や景観を調べていました。それをもとに江戸東京博物館の日本橋周辺ジオラマができました。明治から平成を通じて風景は随分変わってしまったわけだけど、残っている重要なものの一つがこの日本橋高島屋の本館であり、他のデパートや銀行、オフィス、倉庫建築もメインストリートや日本橋川沿いにいくつかありますね。そういうものがどうい背景でどんな都市の景観をつくってきたのか、歴史軸に沿ってこの界隈を探訪してみたいと思います。

国立歴史民族博物館に所蔵されている有名な図屏風があります。この「江戸図屏風」の中央付近に描かれている日本橋はまさに江戸の中心でした。私が日本橋と関わるなかで、一番強烈だと感じるのは「水」という観点から見るときです。小澤尚さんという芸大出身で仙台の宮城大学で教えていた建築家が、明石町出身の下町っ子で佃島の舟宿とずっと仲良くして、それで1980（昭和55）年に一緒に回らないかということで船を出しました。日本橋は今と同様、高速道路の下

でしたが、脇に辰野金吾設計の〈旧帝国製麻ビル〉があって、川から見上げたわけです。これで川下りにやみつきになりました。あとから考えてみると、建築史家の長谷川堯さんがそのちょっと前にボートを降ろしていて、橋を水の側から見る価値を『都市廻廊——あるいは建築の中世主義』（長谷川堯、相模書房、1975年）という本でアピールしていました。



1. 江戸時代初期（17世紀前半）の江戸の様子が描かれた「江戸図屏風」〔所蔵：国立歴史民俗博物館〕
2. 小澤尚氏らと船で日本橋川を下っている様子〔撮影：陣内秀信〕

東京スカイツリーがもっと人気になるかと思いきや、あまりですね。東京タワーのほうがかえってレトロで人気になってしまっていますが、実はスカイツリーの建設位置を決める委員会がありまして、僕もそのメンバーでした。当初さいたま市が断トツでリードしていたのを、逆転でここにもってきたのですが、我々はこの場所にとってもこだわっていました。なぜかという^{くわがたけいさい}と、^{くわがたけいさい}が江戸の鳥瞰図を初めて描いていて、後世の画家が彼と同じアングルから、つまり大川（隅田川）の東側高台から西を見るという構図で描き続けたんですよ。大正時代まで東京の鳥瞰図といったらこの画角。江戸・東京の人たちは定番になったアングルに吸い込まれていたと思います。現代の東京がそれと同じアングルから見えるのが今のスカイツリーの場所なんです。この場所にタワーが建つと、もう一回水の復権あるいは東側の分厚い文化を復権させるいいチャンスになると思ったのと、収益性を考えたときにここが一番いいということで、テレビ局の人達も大賛同してくれました。

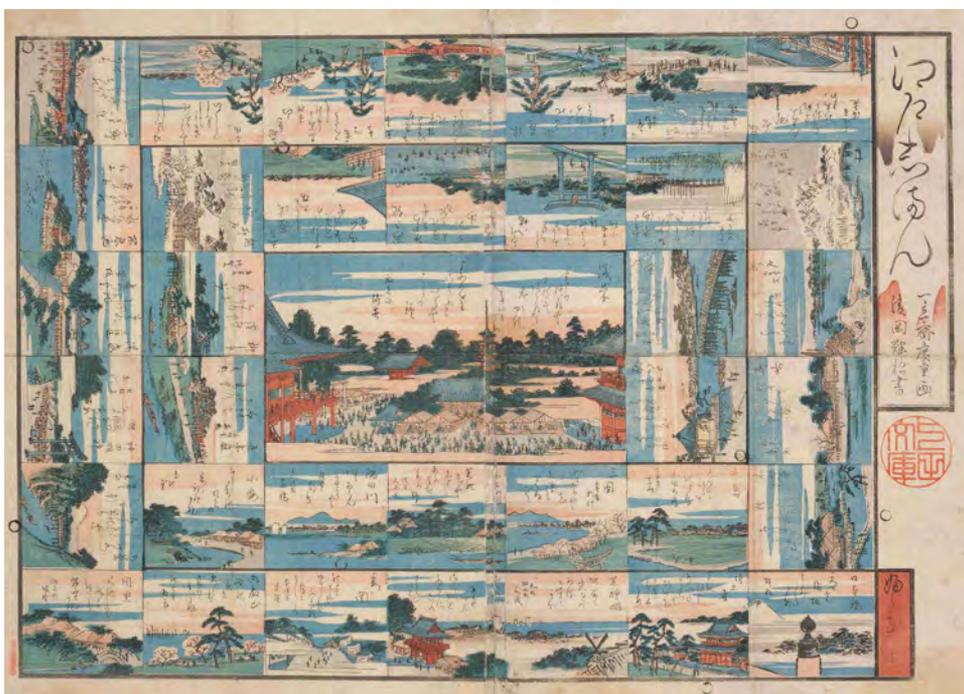
江戸鳥瞰図定番のアングルには日本橋がだいたい中心にあります。日本橋の手前が町人の世界、その手前に大川（隅田川）、水辺に文化施設や行楽地がいろいろあります。ここには寺や神社も中世や古代まで遡るものがいっぱいあって、江戸が都市になる前からこっちが栄えていたわけですね。江戸の港は中世まではこの辺だったのではないかと、品川よりこっちのほうが重要だったのではないかと、という説も最近唱えられています。そのなかで江戸ができてここが中心になる。この構図が面白いのは、支配者階級である武士の大名屋敷などが遠くのほうに、山の手は奥のほうにあり、江戸城も奥のほうにあり、逆に遠くの富士山が強調され、京都そして駿河という天皇と徳川家の重要な場所が上にくる。そして大手門も正面から見えるのでこの構図は非常にいいんですね。日本橋も全部描けますから。鳥瞰図というのはアングルを選んで描かれています。こういう非常に示唆的なもののなかでも、日本橋は常に真ん中に描かれてきました。



1. 鉞形蕙斎「江戸名所之絵」〔所蔵：法政大学江戸東京研究センター〕

2. 東京スカイツリーの登場により、江戸の鳥瞰図同様、隅田川の東側高所から西を見る〔提供：陣内秀信〕

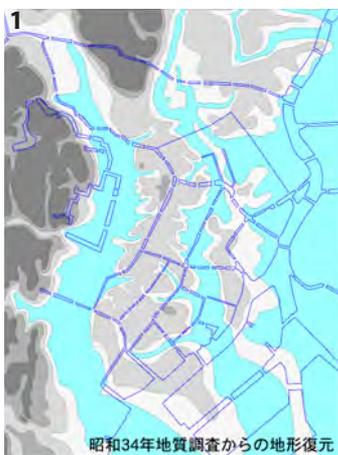
^{すひろく}
名所双六というのも前から面白いなと思っていて、世界にいろいろありますが、これだけ見事に名所、都市の景観をコマにして描いているのは、日本独特の形式です。東京は江戸、明治にいくつも描かれましたが、江戸時代は必ず日本橋がスタート。その画面には擬宝珠があって、奥に江戸城があって、背後に富士山がシンボルとして描かれ、そしてぐるぐる回りゴールは浅草。つまり日本橋ということのは、意識の上でも行楽の上でも中心だったということです。



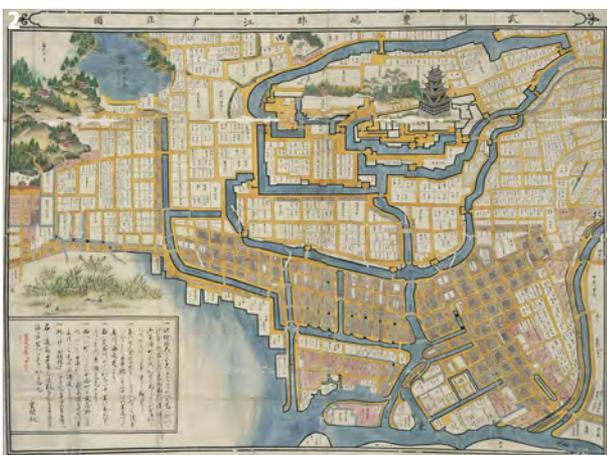
双六「江戸じまん」。出発点はいつも日本橋〔所蔵：都立中央図書館特別文庫室〕

17世紀前半の土地利用を示す図で初期の江戸がわかります。幕府ができてまだ30～40年くらいですね。江戸城、そして江戸の都市を普請するために伊豆や真鶴のほうから石を運び、荷揚げをしました。つまり舟運が栄えました。1603（慶長8）年だと言われていますが、日本橋がかかりました。メインストリートにはドックみたいに舟入堀が入っています。インフラ建設が終わってくると市街地ができ、町人地、武家地、寺社地ができあがってきます。稠密にできた町人地を貫くのが中央通り。今の丸の内から内堀のあたりが日比谷入江になっていて、日本橋あたりから汐留あたりまでは江戸前島と呼ばれる半島でした。神田山（現、駿河台）から前島を抜けて東海道に続く道というのは、地形の尾根を通っているわけ

です。以前プラタモリの銀座編で先述の岡本哲志君が登場した時、タモリさんが銀座通り（中央通り）の真ん中あたりでかがみ込んで、高低差を感じるわけですね。日比谷のほうに降りて行くんです。こうしてインフラを整備しながら江戸ができていったということが、初期段階でよくわかります。



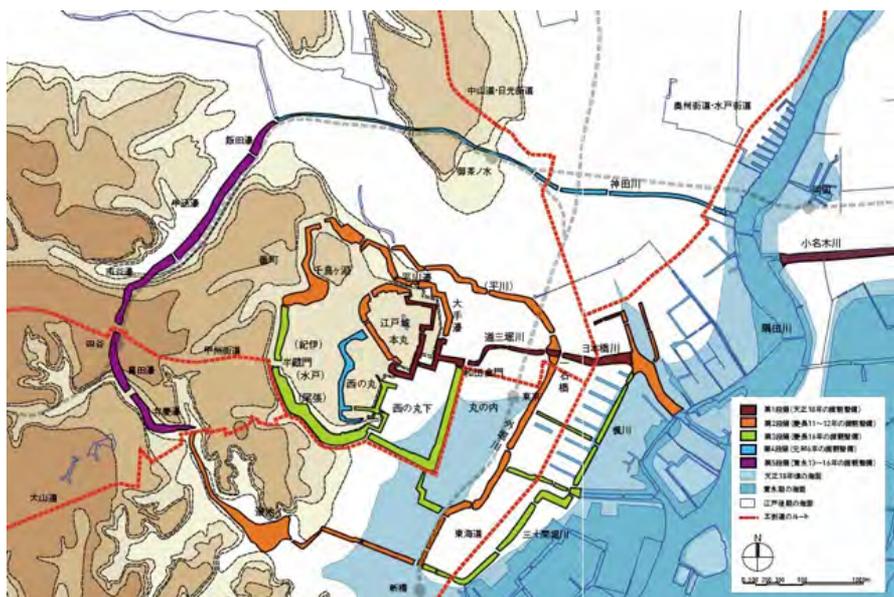
昭和34年地質調査からの地形復元



- 1.1580（天正8）年以前の江戸の地形——1959（昭和34）年地質調査からの復元【作成：岡本哲志】
- 2.「武州豊嶋郡江戸庄図」——1632（寛永9）年ごろに描かれた江戸の絵図【所蔵：都立中央図書館特別文庫室】

江戸の町割り

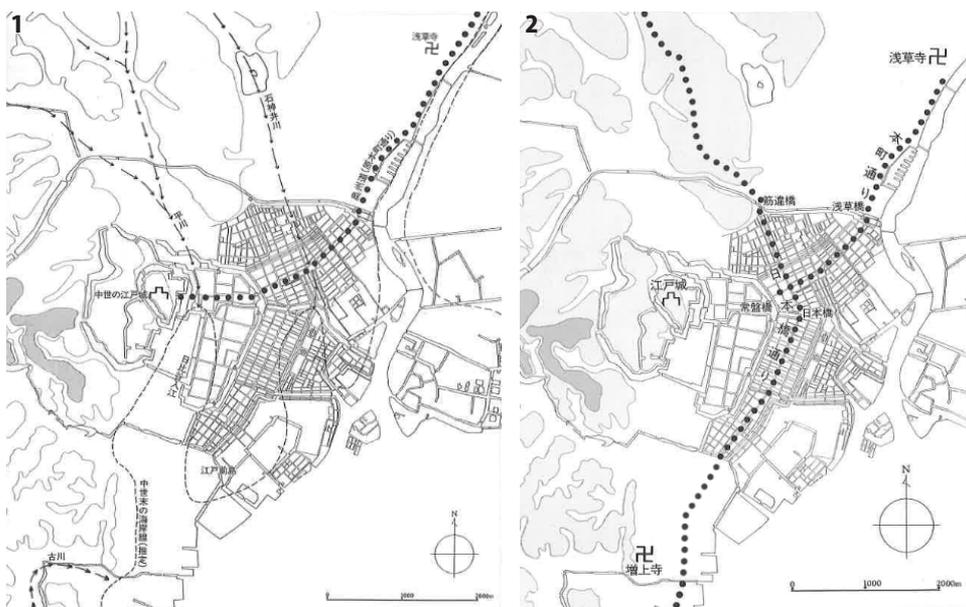
内堀、外堀ができ、もともとあった土地、前島あたりをうまく使いながらメインストリートを通して橋がかけられ、まちづくりと橋づくりが同時に行われているわけです。日本橋、京橋、新橋、数寄屋橋とか地名はみんな橋の名前です。これは世界的に珍しいのではないかと思います。ヴェネチアにもさすがにそういう橋はほとんどありません。だから川は埋められても、橋の名前は残っている。東京らしい記憶の継承です。



寛永期までの江戸城内堀・外堀の整備【作成：岡本哲志】

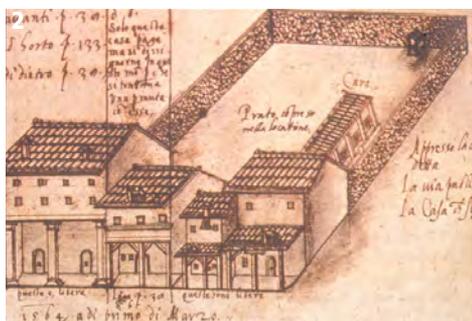
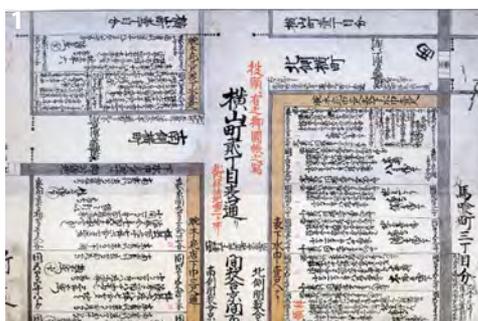
玉井哲雄さんが書いた『江戸——失われた都市空間を読む』（玉井哲雄著、平凡社、1986年）という本があります。画期的な研究でした。彼の解説によると家康が入ってくる直前の海岸線は下図の点線あたり。江戸前島があり、日比谷入江があり、入江の奥に小さな江戸港がありました。街道は北からの奥州道（本町通り）だけ。それが江戸城に向かって延びていました。やがて神田山から日本橋を抜けて前島の尾根を通る日本橋通りができ、奥州道はそこで切り詰められます。

町割りには京都を模倣して碁盤目型を取り入れるんですけど、地形に合わせて、しかも江戸城を囲むように微妙に振っていくのが江戸の特徴です。地形に合わせているので排水にもいいわけです。図らずもこれが富士山のほうを向いていたと思われそうですが、駿河町と本町通りは富士山のほうを向いているという説をあつて建築史家の桐敷真次郎さんが出して非常にアピールしました。



1. 中世末期江戸と発展期江戸の地形対照図。奥州道（原本町通り）と中世末の海岸線および主要河川の推定位置を示した【作成：玉井哲雄】
2. 成立期江戸における本町通りと日本橋通り。日本橋通りが直線的であるのに対して、本町通りは常盤橋と浅草橋の間で折れ線状に曲がっていることがわかる【作成：同上】

私はイタリアと東京の比較研究をしているのですが、イタリアの建築史、都市史を見る上で、よく前近代の不動産資料にあたります。そこには建物が詳細に描かれていて、土地よりむしろ建物のほうが重要なことがわかります。建物ごとに一階、二階、三階を誰が所有して、どういう用途で、面積はいくつ、と出ている。



1. 木造文化。横山町の沽券図（部分）【所蔵：東京都立中央図書館特別文庫室】
2. 石造文化。16世紀後半のボローニャ【出典：P.L.Cervellati, *La nuova cultura delle città*, Milano, 1977】

日本は全く逆で、奥行き二十間の図に町家の境界線が引かれているだけ。所有者（地主）、家守の名前が書いてあって、間口、奥行きそして売買価格、そういうものが記載されています。ソフト情報はいっぱい入っているけど、ハード情報は入っていない。けどこれが、実は江戸を管理するのに非常に重要だったということです。

江戸は景観設計が行われていたとよく言われます。宮本雅明さんという九州芸工大で教えていた都市史のパイオニアがいますが、彼がよく言っていたように、城のほうに向かうところにしばしば三階建ての櫓が出てきます。玉井さんによれば、初期に入り込んだ重要な草創名主たちの多くが、これを構えて自分たちの力を誇示したと言うわけです。だから景観が統一されてくる前は、のびのびとしたこういう風景が江戸にありました。先程見た国立歴史民俗博物館蔵の「江戸図屏風」にそれがよく描かれています。角地に意味があるという構造もよくわかります。舟入堀も初期の江戸の特徴です。その痕跡は考古学の発掘でも証明されていて、地層の確認で分かるそうです。中央区は広く発掘が進められていて、日本のローマだというくらいに出土品がたくさん出ているのです。

駿河町を描いた浮世絵の面白い分析があります。1970年代終わりから1980年代はじめに東京大学の芦原研の加藤さんが修士論文で書いたものです。絵のなかのどの要素が景観を決定づけているのか？というもので、要素を外していきます。富士山を外し、人混みを外し、ついには建物を外しても景観の印象は残っている。つまり景観を構成している重要な要素は置き看板とか暖簾とかそういうものであって、建物だけで都市が成り立つヨーロッパのパースペクティブとはだいぶ違うと。これはなかなか示唆的です。

日本橋はもちろん広重もしょっちゅう描いているわけですが、面白いのは江戸城をはっきり描かないのです。描くのは森と水と多少の石垣くらい。もちろん天守閣はもう焼け落ちていますが櫓はあります。しかし富士山を強調して、ここが主役であると表現する。江戸城をリスペクトはしています。しかし建物自体を捉えて描こうとはしない。これは江戸の絵師たちの特徴です。



1. 歌川広重「名所江戸百景 する賀てふ」

2. 歌川広重「東都名所日本橋之白雨」

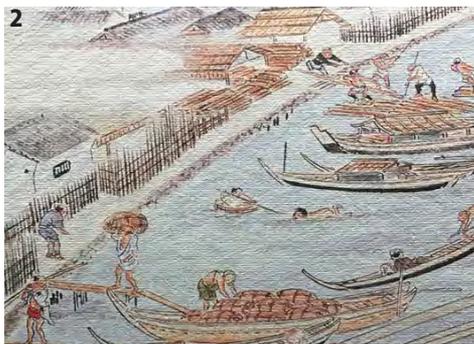
魚河岸だった日本橋

日本橋は魚河岸でした。ヴェネチアのような、あるいは蘇州のような光景がありました。今の神田鍛冶町あたりから南に下り日本橋にかけての中央通りの江戸時代の様子を描いた「熙代勝覧(きだいしょうらん)」という絵があります。町家の店の様子がよくわかり、最後に日本橋川の河岸が見えます。25年前にベルリンで発見され、江戸博にやってきてフィーバーした有名な絵で、現在複製が日本橋三越の地下通路に飾られています。ここにはいろいろなものが描かれていて日本橋の当時の様子がわかります。水遊びしている兄弟、富士山を見て立ち止まっている武士、千葉から来る船。どんどん荷揚げしています。そして路上でものを売る人。今川橋近くの町家はもう場末ですが、日本橋近くの町家は黒漆喰の豪華な江戸風で格を表現しています。お金がかかっています。鬼瓦があつて棟飾りもすごい。中心市街地、象徴的な空間だけど、こんなに賑わっていました。誇張もあるかもしれないけれど、リアリティを感じさせます。ここには大店の呉服店などもあります。庇の内側に暖簾がかかっていますが、それを境に店になります。ここが明治に入ると銀行になったりデパートになったりしてゆくわけです。



1. 陣内氏の著書。表紙の写真は1870(明治2~3)年ごろの日本橋における舟運・経済活動の様子
[出典：陣内秀信著『東京の空間人類学』筑摩書房、1992年]
2. 参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図測量原図」。1884(明治17)年頃の日本橋・江戸橋周辺
[出典：農研機構 (<https://arcg.is/08HTiz>)]

玉井さんが収集した大店の平面図を見ると、店に穴蔵というのが 있습니다。穴蔵は火事になったときに金品や重要な記録を入れて土を被せ、水を撒いて守ったと言われてしています。火災都市ならではの仕掛けです。当時は預ける銀行もなかったので、こうやって自分で守ったわけです。表通りは華やかで、裏通りに行くと生活感があって洗濯物を干しています。ヨーロッパは18世紀くらいから表通りに洗濯物を干さなくなったと思いますが、1500(明応9)年ごろのヴェネチアはみんな竹の棒を出して、ちょっと前の上海やシンガポールのように洗濯物を干していました。路上には立ち売りがあり、屋台があり、茶屋があり、一杯飲み屋がありました。喧嘩もあった。建設現場では地固めをしている。日本橋のたもとには早くから魚河岸ができます。関東大震災の後、築地に移転しました。



1. 作者不明「熙代勝覧」。1805（文化2）年ごろの江戸日本橋から今川橋までの大通り（約700m）を東側から俯瞰し、当時の江戸町人文化を描いた作品。1999年にドイツで発見され、現在原画はドイツのベルリン国立アジア美術館が所蔵している

2. 兄弟が水遊びをしている

3. 河岸に魚を荷揚げする押送り船。房総あたりの近海魚を生きの良いまま運送

4. 日本橋近くの堂々たる町家群

5. 今川橋近くの町家群

6. 江戸店でも随一の呉服商・三井家の越後屋

7. 鯉の立ち売り

すべて [三越前駅地下コンコース壁面に常設の「熙代勝覧」複製絵巻を撮影]



1. 青物、土物の立ち売り
2. 往来の一杯飲み屋
3. 喧嘩の様子
4. 事業と木遣い、家普請の地固め
5. 屋台の茶屋
6. 鷹匠
7. 屋台の鮎売り

すべて [三越前駅地下コンコース壁面に常設の「現代勝覧」複製絵巻を撮影]

佃島の沖には大型廻船が停泊しました。^{はしけ}舢舨に積み替え、河川の掘割へ入り荷下ろしします。これはアムステルダムやヴェネチアと同じやり方で、内部に港の機能が分散して河岸が連なっていたのです。だからあちこちが賑やかな交易商業都市、流通都市でした。その様子を地図上に落としてくれたのが鈴木理生さんの名著『江戸の川・東京の川』（鈴木理生著、日本放送出版協会、1978年）ですが、この分布は明治中期～後期まで変わらず続いていました。後に埋立て地をつくったときにも必ず運河で囲い河岸をつくっていたのです。だから日本橋は、一つの島なんですね。銀座も島です。これが寄木細工のように集まっている。これは近代にも続きます。だから全部賑やかな港町になるわけです。



江戸の河岸の分布 [作成：岡本哲志（鈴木理生が作成した図をもとに）]

他にも特化した河岸が日本橋のまわりにいっぱいあります。こういうのも面白いです。河岸を大坂では浜と言うらしいですが河岸と言うのも日本独特だと思います。徐々に蔵が並ぶようになります。ヨーロッパだとここに商館や邸宅が建ったりしますがそうではない。必ずこの空間は物流空間になっていく。あとは大名屋敷になって築地堀がまわる。日本橋から少し行ったところに江戸橋があり、ここは市場として栄えます。同時に盛り場になります。もともとは火除け地です。冬の乾燥したときに北東から風が来て、火事が延焼する危険性があるのでプロテクトするわけです。土手をつくり土蔵をつくりオープンスペースをとって、いざというときには壊せるような仮設建築にしておく。ところがだんだん盛り場化していき、奥のほうに怪しげな人々の楽しめる空間ができます。

初期のできたての新地に芝居町が生まれます。そこには茶屋という遊廓建築が建ちます。風呂屋があって湯女がいる。芝居を観に行くのにもお金持ちは船。これもヴェネチアと似ています。浅草に芝居小屋が移っても、幕末までお金持ちは船で行くというのを続けたわけですね。ようやく屋形船が蘇ってきたのが1970年代後半です。芝居町は銀座の裏のほうの木挽町や日本橋の裏手の堺町・吹屋町に、初期の吉原遊郭もそのあたりにありました。そういったアンダーワールドが商業中心街のすぐ裏にあるというのがまたヴェネチアにそっくりです。



2

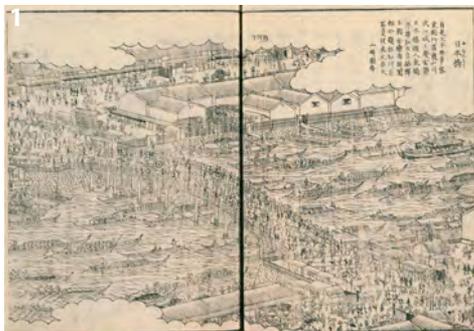


1. 歌川広重「名所江戸百景 京橋竹がし」
2. 1909 (明治 42) 年ごろの日本橋 [出典：『最新東京名所写真帖』小島又市、1909 年]
3. 1830 (文政 13) 年頃の木挽町 [出典：斎藤幸雄編、長谷川雪旦画『江戸名所図会 1 巻 2 冊』1834 年]
4. 明暦江戸図に芝居街をプロットした [作成：高村雅彦]
5. 浅草橋周辺の船宿と屋形船 [撮影：陣内秀信]

日本橋の魚河岸に沿って荷揚げのアプローチがあります。日本は結構個人主義なので、こういう風にシステムができていました。全部権利が図化されています。魚河岸の存続、営業を奉行所に願い出た嘆願書の資料を見るとよくわかります。河川に石垣が続いていて、そこから路地が入っています。これが地所の利用権なんです。幕府の土地ではあるけどみんな私的な空間のように使っている感じです。権利を売買するのです。川側が裏納屋、通り側が表納屋といって板庇がかかり、板舟というのが並べられて、その上に魚を置いて商売する。魚を新鮮に保つために井戸がある。

明治の「新撰東京名所図会」の日本橋魚市場も賑わっていますね。明治の終わりごろです。通りがありまして両方に板舟があって流行っている様子がよくわかります。これは明治後期の裏の通りです。これは理科大の伊藤裕久さんの研究室が研究していたのですが、ヴェネチアにもリアルマーケットがあって魚の市場も含めて賑やかですが、できるだけ住民を排除していく方向に発展しました。アラブもそうです。スーク (バザール) といって人が住まない空間になっていくんですが、江戸・東京は人が住みながらだんだん市場の機能をもっていきます。板舟

を持って、権利をもって魚を売買する。そういう魚河岸関係の人々がたくさん奥にいて、新町、新道をつくってきた。だから表通りだけじゃないんです。裏手にもずっと広がっていました。鰹節とか海苔屋さんとかいっぱいありますよね。お寿司屋さんもちろん多いですが、こういう遺伝子が受け継がれているのが日本の大きな特徴です。



1. 江戸の日本橋魚河岸の様子 [出典：斎藤幸雄編、長谷川雪旦画 『江戸名所図会 1 巻 1 冊』 1834 年]
2. 日本橋の魚市 [出典：同上]
3. 大正中期の「(東京名所) 魚河岸」 [所蔵：中央区立郷土天文館]
4. 日本橋魚市場の売り場と居住空間 [作成：伊藤裕久研究室]

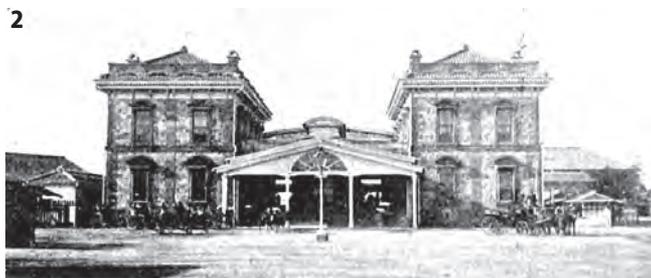
江戸から東京への文明開化

文明開化が始まると人力車や馬車が出てきます。やがて鉄道馬車が 1877 (明治 10) 年に開設されると、江戸時代の反りのある橋ではやっていられなくなり、架け替えざるを得なくなる。架け替えたのが洋式の木造橋ですが、少しトラス的な感じでフラットになります。そしてさらに、中央を鉄道馬車が走るの、両側に歩行者のための歩道をつけます。そうやって近代化に対応しました。もともと大きな船が入っていたころは、橋の下のクリアランスを取るために反っていたのですが、橋の形式も時代によって変わる。これもヴェネチアと同じです。

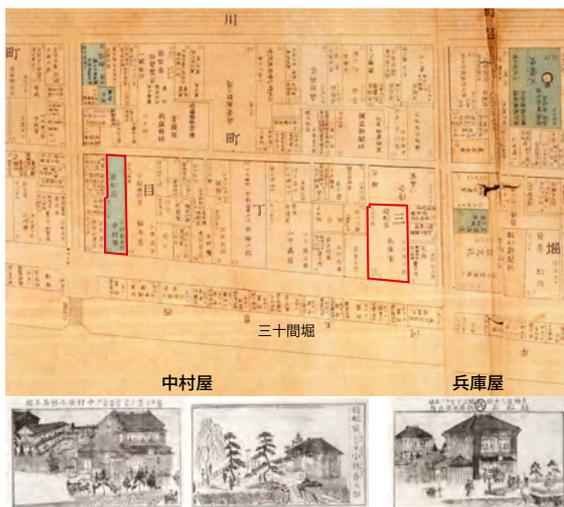


1. 歌川芳虎画、蔦屋吉蔵版「東京日本橋風景」1870年
2. 歌川国輝（2世）、伊勢屋兼吉「東京第一名所日本橋御模様繁榮之図」1873年
[所蔵：都立中央図書館特別文庫室]

東京がますます陸の都市になっていく時にまず、銀座煉瓦街ができます。その南、汐留川沿いに1872（明治5）年、〈旧新橋駅（新橋停車場）〉が誕生します。もともとそこは遊びのメッカ、江戸時代から続く船宿の集中地区で、多くの船宿が立ち退きました。その奥の大名屋敷を三つも潰して敷地が確保されました。もう一つの船宿集中地区は神田川が隅田川に合流する柳橋ですね。旧新橋駅は再現されたんですがちょっとかわいそうですね。もうちょっと広場が堂々としていて銀座とうまくつなげば、本当に愛される再現になったと思いますが。いずれにしても銀座に顔を向けるかたちで登場しました。汐留川の船宿は、何軒か中央通りと昭和通りの間にあった三十間掘に引っ越して、船宿や待合ができました。ここにも貸座敷がありますね。三十間掘は戦後埋め立てられました。そういうわけで江戸の情緒が銀座の裏手でも継続していました。



1. 参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図測量原図」——1884（明治17）年の新橋停車場周辺
[転載元：農研機構（<https://arcg.is/1TKnvj>）]
2. 新橋停車場 [出典：瀬川光行編『日本之名勝』史伝編纂所、1900年]



明治初期の船宿 [下図出典：平田勇太郎著『東京京橋区銀座附近戸別一覽圖』平田勇太郎、1902年（上部図）／深満池源次郎編『東京商工博覧絵 上下』深満池源次郎、1885年（下部図）]

新橋駅ができたころ、日本橋周辺にはモニュメント建築が登場します。一つは日本橋兜町に建った最古の銀行〈第一国立銀行〉。もう一つは日本橋駿河町（現、日本橋室町）の〈為替バンク三井組（三井本館の前身）〉。我々は同世代三人の建築史仲間がいて、藤森さんともう一人は工学院大学の初田亨さん。彼は、当時まで擬洋風と呼ばれていたこういう建築を「和洋折衷」と定義づけました。大工棟梁が大変エネルギーに見よう見まねで独創的なものをつくったので、この時代の日本にしかない建築様式がたくさん実現したと評価したわけです。以来、みんなこういうものに非常に関心を向けるようになりました。

このモニュメント建築を巡っては、いろいろな解釈があります。『都市空間のなかの文学』（前田愛著、筑摩書房、1992年）を著した前田愛さんという文学者は、第一国立銀行の錦絵を評価しました。都市を読むというのは、日本では文学者が先にやっていた。建築は出遅れた。文学者が明治の東京に光を当てて主人公がいろいろそのなかで動くわけですが、心理を読んだり状況を解釈したりという面白いテキスト解釈をやったわけです。前田さんは第一国立銀行の錦絵について、江戸のシンボルは自然の富士山だったが、初めてそれを凌駕する人間がつくったモニュメントが堂々と前面に描かれていると論じました。

小林清親という文明開化の最後の浮世絵師と言われる人もまた、第一国立銀行を描いています。絵師は新しい文明開化によって登場するものに非常に好奇心をもって、前景は江戸の情緒を描きながら背後に近代の象徴をもってくる、と美術史家の小林忠さんは論じました。このように江戸と東京をつなげて考える見方が初めて登場したのは意外にも1980年代からなんです。片や小林忠さんという美術史家、片や初田亨さんという建築史家です。これで江戸と東京が繋がったわけです。

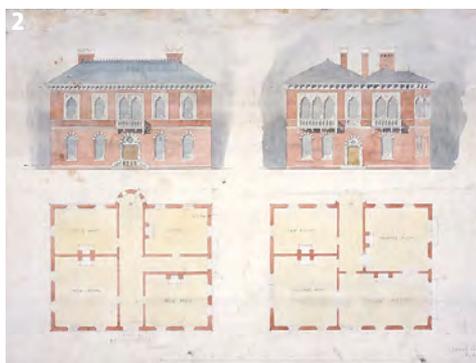


1. 小林清親「海運橋（第一銀行雪中）」

2. 昇斎一景「海運橋為換座之図」[所蔵：日本銀行金融研究所貨幣博物館]

水辺に登場する明治の近代建築

辰野金吾は藤森さんの得意中の得意ですが、空間論的、場所論的に非常に面白いと思うのが、永代橋の西の袂にあった〈旧北海道開拓使出張所（開拓使物産売捌所）〉です。開拓使の物産販売所ですが、この建物で日本銀行が最初の営業を行ったことでも知られています。これはジョサイア・コンドルの設計で、図面を書くのに辰野金吾などの弟子たちも参加したと言われているようですが、これがなんと水辺に面したところに建っています。ジョサイア・コンドルも日本に来ていろいろ公的な仕事をやるのに、西洋風のものを持ってくるのはそぐわない、けれど和風をやるわけにはいかないので、イスラーム風とかヴェネチア風を積極的にやっていた時期があるという、その代表作です。本当の水際でなくてちょっとセットバックしているところや、ネオゴシックの外観、プランなども、ちょっとずつヴェネチアの様式とは違いますが、意識していたことは明らかです。



1. ジョサイア・コンドル〈旧北海道開拓使出張所（開拓使物産売捌所）〉東京都中央区
〔出典：『コンドル博士遺作集』コンドル博士記念表彰会、1932年〕
2. 旧北海道開拓使出張所の立面図（南面・東面）および平面図（1階・2階）
〔転載元：日本銀行金融研究所アーカイブ〕

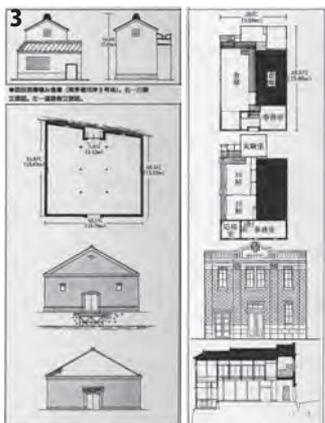
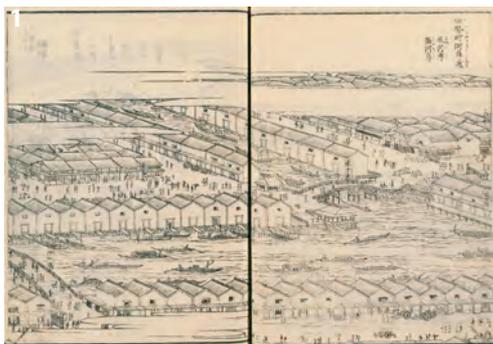
近代建築、洋風建築がどこにどういう背景で出てくるか、というのは大変面白いテーマです。かつて江戸橋ジャンクションの下には日本橋川の支流の楓川が流れていて、その川沿いに先ほどの第一国立銀行が登場し、〈兜町日証館ビル〉のあるところに日本の財界のリーダーである〈渋沢栄一の自邸〉が登場します。辰野金吾は東大の前身である工部大学校でジョサイア・コンドルに師事した後、ロンドンに留学。三年目か四年目かの、留学を終える年にヨーロッパを旅行します。特にイタリアをたくさん旅行して二、三週間ヴェネチアに滞在したこともあるそうです（大阪芸大の石井元章さんが調査しています）。だから辰野はヴェネチアのことをよく知っていました。帰国後ちょうどいいタイミングで渋沢栄一が日本橋川周辺をヴェニスのような国際海洋都市にしようと開発を始め自邸の設計を依頼されたら、藤森さんも書いています。ただ渋沢邸はちょっとヴェネチア様式とは違ってはいますが、いずれにせよヴェネチアの商館建築をよく研究して下敷きにしているのは明らかです。



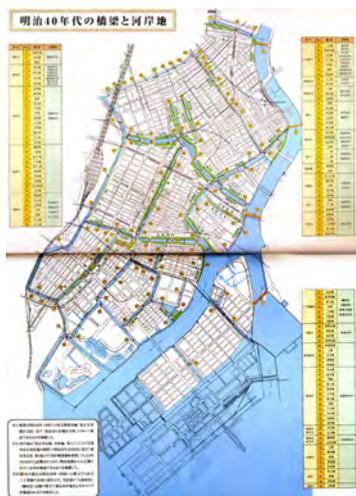
1. 井上探景「江戸橋ヨリ鑑橋遠景」[所蔵：中央区立郷土天文館]
2. 渋沢栄一自邸位置（図中赤枠部）。参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図測量原図」
[転載元：農研機構 (<https://arcg.is/08HTiz>)] を加工して作成

ところが一方で、ここはずっと江戸時代の舟運の基地を継承していて、明治になっても土蔵造りが並んでいました。ただ水際の空間が変化していきます。1889（明治22）年に施行された東京市は、財源を得るために徐々に土地を民間に売り始めます。同時に物流施設や蔵だけでなく、事務所や住宅を構えても良いとなっていくので、水際にいろいろな建築が立ち始めるのがこの時期です。

また先ほど言ったように、1907（明治40）年にはまだ河岸が江戸時代と同じようにあった。つまり高島屋が1900（明治33）年に南伝馬町に最初のお店を構えていたころ、まだまだ水辺の河岸が生きていました。江戸と全然変わっていないですね。大きく変わってくるのは洋風の建築が登場してきたこと。一つのポイントが橋の袂になります。当時から交差点と橋の袂は明らかに地価が高かった。それだけ商業的にもビジネス的にも優位なわけです。橋の袂に近代建築の秀作が勢揃いしたというのは、日本の一つの特徴だと思います。



1. 伊勢町河岸通り [出典：斎藤幸雄編、長谷川雪旦画『江戸名所図会 1巻1冊』1834年]
2. 参謀本部陸軍部測量局「五千分一東京図測量原図」：伊勢町の河岸
[転載元：農研機構 (<https://arcg.is/1rem4K>)]
3. 近代における河岸地に登場した新しい建築 [作成：岡本哲志+久保田雅代]
4. 橋の袂に建つ建築群 [出典：『街・明治大正昭和——絵葉書にみる日本近代都市の歩み 1902-1941 関東編』都市研究会、1980年]



明治40年代の河岸地 [出典：東京都中央区教育会『水のまちの記憶——中央区の堀割をたどる——中央区立郷土天文館第9回特別展図録』中央区教育委員会、2010年]

ヴェネチアに憧れた日本橋

日本橋川のそばに渋沢栄一邸ができて、それがきっかけで当時の文学者、建築家、文化人、若者たちが、このエリアに憧れをもち始めました。先述の長谷川堯さんはここを水上のシャンゼリゼと評しています。ちなみに長谷川さんは日本橋のデザインについての論も残しています。意匠設計は旗本の血を引く^{つまきよりなか}妻木頼黄。薩長の田舎侍が進める近代化を見返してやろうということで、水の都・江戸を象徴すべく水面側から見るようにして日本橋をデザインしたと。

東大で比較文学研究をされていた平川祐弘先生の著書『芸術にあらわれたヴェネチア』（平川祐弘著、内田老鶴圃、1962年）は面白い本で、これを見ると、「パンの会」*の会員でもあった詩人の木下空太郎は、ゲーテの『イタリア紀行』を高校時代にドイツ語で読んで、それが彼の詩作にもものすごい影響を与えたと書かれています。また童話作家のアンデルセンは『即興詩人』を書いています。こちらは早くから森鴎外によって訳されていました。どちらも北のヨーロッパ人が南のイタリアに憧れて書いたものです。日本人はその両方を読んで、大きな影響をヴェネチアに関して受けるんです。小網町の河岸、兜町の鎧橋、そして渋沢邸などに表れています。後のコンクリート建築のパイオニアでもある中村鎮。彼が若いころ、やはりヴェネチアに憧れて大学で教わっていた。で、日本橋川付近を水上公園に見立てた計画を雑誌に発表したわけです。ただヨーロッパの真似をすればいいというわけではなくて、江戸情緒も加味する。新しいもの、伝統的なもの、芝居小屋も寄席も。パンの会の連中が日本橋川をセーヌ川に見立てつつ集まっていたメゾン鴻巣という場所があるのですが、そこをもっと改築すべきとか。モダン、ハイカラ、和風が混じり合った計画でした。どこの家にも船を置くべきであるとか、斬新な案です。

当時は舟運がどんどん強化されていったんですね。動力船も出てくる。江戸時代には塞がれていた水道橋のところも、船で通れるようになりました。ここに甲武鉄道のターミナル飯田町駅もできた。というわけで明治中期以降、船が巡回できるルートが完成します。日本橋の魚河岸と並んで青果市場の大根河岸もすごかったんですね。今も京橋のところに碑が立っています。石を積んで、地盤を削って木造三、四階建ての舟屋が建てられています。そこに船を着けて、階段で

荷揚げする。こういうのが平気で関東大震災後、また復興してつくられていたということですね。後に徐々に築地に引っ越しましたが。

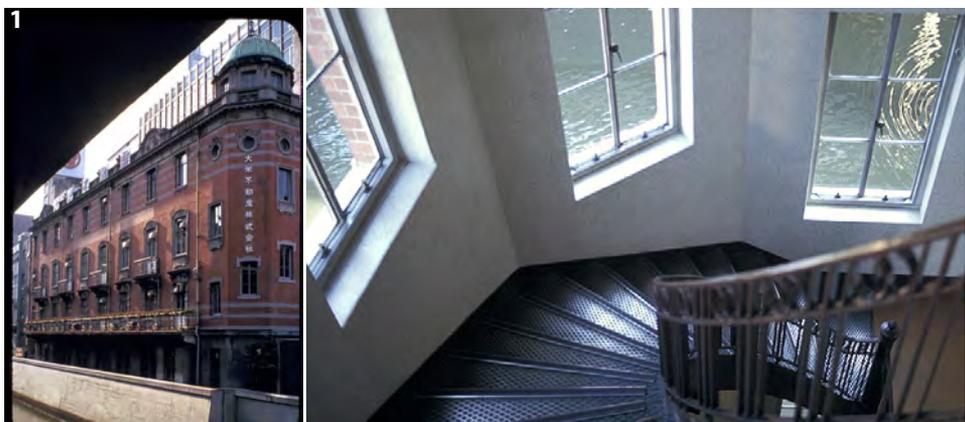
*パンの会——明治末期に起こる耽美主義文芸運動の拠点となった、青年文芸・美術家の懇談会のこと。



関東大震災後の大根河岸復元図 [作成：松浦由佳（法政大学高村雅彦研究室）]

今に残る日本橋・水辺の名建築

辰野金吾設計の〈旧帝国製麻ビル（大栄不動産ビル）〉は1990（平成2）年まで建っていました。この階段室。入口からこういう風に入って降りていったんですよ。ある人はヴェニス舟歌が聞こえてきそうだと言っていました。銅板のドームもチャミングです。大正時代には土蔵造りの建物が、近代的な鉄筋コンクリートに変わり始めます。そして高層、中層のモニュメンタルなデパート建築が江戸からのコンテクストの上に新しい様相で、そして特に角地を意識して登場するというのも注目されます。



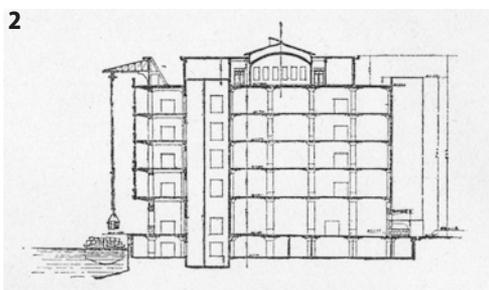
1. 辰野金吾〈旧帝国製麻ビル（大栄不動産ビル）〉東京都中央区、1912年（1990年解体）[撮影：陣内秀信]
2. 「三越呉服店」[所蔵：都立中央図書館]
3. 「白木屋呉服店 SHIROKIYA DEPARTMENT STORE IN TOKYO」[所蔵：同上]

吉川弘文館から『みる・よむ・あるく 東京の歴史』(共著、吉川弘文館、2017年～)という10巻本が出ました。東大の吉田伸之先生がリーダーシップをとって僕も企画編集者の一人として協力し、多くの著者を集めてつくられたものです。中央区と下町3区分が2018(平成30)年に出ています。ぜひみなさん読んでください。大変力作の巻です。そのなかで1895(明治28)年の地図に代表的な建築をプロットし写真を添えています。今説明してきたような建築が出揃ってくる基盤の時代のころですね。この町並みは全部、関東大震災後の区画整理を受けてしましますが。



- 1.1909(明治42)年頃の日本橋通り [出典:『街・明治大正昭和——絵葉書にみる日本近代都市の歩み 1902-1941 関東編』都市研究会、1980年]
- 2.1930(昭和5)年頃、日本橋より三越を望む [出典:同上]

で、注目すべきはこの建物。1930(昭和5)年に竣工した〈三菱倉庫本社ビル(旧三菱倉庫江戸橋倉庫ビル)〉。輸送に舟運が使われていたのが明らかな建物です。さらに塔屋が船橋になっていて、機能が形に象徴的に面白く現れている。写真を見ると舳が接岸されて、ホイストクレーンで荷を上げていますね。最近改築されて高層のオフィス棟が建ちましたが、外壁は保存されています。



1. 竹中工務店〈三菱倉庫本社ビル(旧三菱倉庫江戸橋倉庫ビル)〉東京都中央区、1930年 [出典:まちなみらい塾『日証館——基壇上構築物に関する調査報告書』2017年]
2. 三菱倉庫本社ビルの断面図 [出典:同上]

重要なのは、この界隈にはまだ良い建築が残っているということです。その一つが〈日証館(旧東京株式取引所貸ビルディング)〉。写真は足下に堤防ができる前に撮られたものなんですけれど、ここにバラスト(手すり子)がついている。その下は実は自前の防潮堤なんです。土木構造物と建築が一体となっている。オリンピック後、その外側により高い防潮堤が築されましたが、裏にオリジナルは残っています。地下にも部屋を取るの、少し隙間を取って採光しているんです。そしてこれはベタ基礎なんですね。コンクリートの堤防がそのまままで巡っていて、洗面器の上に建物がかかっているようなものです。基礎の下に長い松杭が密度高く打ってあります。

実は、〈三菱一号館〉、〈丸の内ビルディング〉、〈東京駅〉は全部杭基礎を打っているわけですが、初めてこの時期に、水から直接立ち上がる建築が登場したと言えます。それまではちょっと水から引いていました。さきほどの渋沢邸も。ヴェネチアと全く同じ構造の建築が昭和初期に何棟か日本橋川に建ったのです。ヴェネチアと同じような近代建築が、水際にできたというのは再評価すべきではないかなと思います。〈東京証券ビル本館〉は残念ながら取壊されてしまいましたが。



1. 横河工務所〈日証館（旧東京株式取引所貸ビルディング）〉東京都中央区、1928年 [出典：まちふねみらい塾『日証館——基壇上構築物に関する調査報告書』2017年]
2. 日証館の断面図 [出典：同上]
3. 隅田川沿いの秀作建築群 [出典：同上]
4. 空中より見た日本橋川沿いの近代建築群 [出典：『街・明治大正昭和 絵葉書にみる日本近代都市の歩み 1902-1941 関東編』都市研究会、1980年]

歴史を回遊するオールド・トーキョーの未来

川の上に高速道路が走る今の状態になってしまったのが、東京オリンピックの直前です。当初は川を干して川底に道路を通す案もあったのですが、それを回避して今の計画になりました。近い将来何らかのかたちで取り去れるだろうと思いますので、川を干さなくて良かったなということです。良い動きもあります。日本橋川に面して「かわてらす」や船着き場などが登場し始めています。日本橋の船着き場は中央区が3.11の震災後、4月にオープンしてくれました。今でもよく使われています。



1. ニホンバシ イチノイチノイチ (国分ビル)
2. 豊年萬福の「かわてらす」(夏の京都などでよく見られる「川床」の東京版)
3. 日本橋船着場 すべて [提供: 陣内秀信]

さきほど説明した日証館はまちふねみらい塾で建築家の阿部彰さんが中心となり私も参加して調査をしたのですが、自前の美しいデザインの防潮堤を見えるようにし、その先に船着き場もつくろうという計画もあります。管理をしている不動産会社も文化的な興味をもってくれているし、河川工学の大家・山田正さんも関心を広げてくれてここに浮棧橋をつくれるというお墨付きをくれていて、いま都やオーソリティにアプローチをしているところです。なかなか難しいでしょうけれども、こんなことができなくはない。



計画中の浮棧橋イメージ
[作成: 阿部彰 (まちふねみらい塾)]

2018（平成30）年の10月4日毎日新聞の連続記事で、高島屋元社長・木本茂さんと対談をしました。東京では大規模再開発が進んでいますが、従来のように経済性とか機能性だけじゃなくて、その場所の固有性、魅力、土地の記憶、思い入れ、文化的な建物の継承、そういうもの全部受け継ぎながらやっていくべきだと。かつて日本橋への来客の多くは郊外から出てこられる文化性の高いご婦人方でしたが、今は都心のマンションが増え、都心のニューカマー、江戸や東京の文化を知らない人たちにとっても日本橋が重要になってくる。それは室町に建った三井のコレド室町も全く同じですよ。全く客層が変わりましたので。高島屋さんに来る人たちも変わりつつあると。今は一人勝ちになっちゃう、そういうデパートではない。たとえばギンザシックスなんかも街から連続するようになってきているんですよ。このように、街とのつながりを重視するようになってきました。日本橋高島屋では本館と新館の間のギャラリーのところでそれが実現しているわけですね。両側がショップやカフェになっている。中央区は大きい広場をとりにくい。特に中央通り、日本橋から銀座にかけては。室町のほうは裏にとってきたわけですけど。そういう意味で賑わいのあるまちづくりを、歴史を活かしながらやっていきたいというのが、この木本元社長の持論で本当に説得力のあるお話でした。

日本橋から新橋までのエリアは江戸、文明開化、モダニズム、戦後と重厚な歴史があります。それらを活かし、街としての回遊性をもたせること。旧新橋駅から上野駅までゆっくり歩けるといいのですが、現在の東京は残念ながらそうはなっていません。ただ、今は京橋も元気になってきました。そこもエドグランとすることができました。明治屋を保存再生しました。高島屋ではギャラリーができました。ブリジストン美術館も建替えてアート発信基地を一緒につくろうとしています。というわけで、東京が縦につながってくると江戸の熙代勝覧に描かれていた、人々が江戸のメインストリートを歩いて楽しんでいたようなああいう歩き方が、21世紀のこの中央通り沿いでもできるんじゃないでしょうか。さらにそこに舟運が復活してくれば、これは世界のどの都市にも増して、東京の魅力が上がるんじゃないかなというふうに思います。